

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 竹内 聖一

竹内聖一氏の論文「実践的知識と意図」は、私たちは自分の行っている行為について「観察によらない知識」すなわち「実践的知識」をもっているとする、イギリスの哲学者エリザベス・アンスコムの主張を徹底的に分析し、その意義を洗い出すことを目的としたものである。アンスコムの実践的知識の考え方は、行為を信念や欲求との因果関係の中で捉えようとする「行為の因果説」と並んで、しかしそれと対置する形で、現代の哲学的行為論に大きな影響を与え続けており、本論文もそうした潮流の中で、一つの新機軸を提出しようと目論むものである。

竹内氏は、まず、「観察によらない知識」を四肢の位置の知識と同一視するという、しばしば行われる通常の解釈を取り上げ、実践的知識は、四肢の位置の知識と違って、事実と一致することが求められる知識ではない、として通常の解釈を斥ける。その上で、アンスコムの文脈に沿って、二つの直観的に正しいと思われる論点を提示する。すなわち、「自分のしていることを知るために何かを観察する必要はない」という論点と、「自分が何をしているかを知るためには観察が必要である」という論点である。この二つは明らかに矛盾し、アンスコムの議論はジレンマに陥る。これに対し、何をしようとしているのかという自分の「意図」についての知識と、何をしたことになっているのかの知識とを区別する、という「二要素説」の考え方が解決策としてありうるが、竹内氏は、この考え方はアンスコムの議論には合致しないとして却下する。その代わりに竹内氏が提起する理解仕方は、実践的知識をアスペクト知覚の一種として捉えるという道筋である。つまり、「観察によらない知識」とは自分の「意図」ではなく自分の「行為」をあるアスペクトの下に捉えることにほかならない、とするのである。こうすることで、アスペクト把握が観察に先行し、観察と独立であることにより、実践的知識は観察必要性と両立することになる。これは同時に「知識」という用語に対して、「正当化された真なる信念」という伝統的意義だけでなく、「あるアスペクトのもとでの把握」という意義をも加えるということである。竹内氏はさらに、このように捉え返された実践的知識は、行為の遂行を導くという意義を本質的に担っているという論点、つまり、意図と行為が一致しなかったときには行為の方を修正するという「一致の向き」を持つ事態であるという論点を、ファルビーの解釈などを手がかりにしながら打ち出す。けれども、アスペクトには多様なものがありえ、どれが正しい権威あるアスペクトなのか、という問題が残る。これに対して竹内氏は、この権威の問題を一人称特権に集約させた上で、ヴェルマンの議論を手掛かりにしながら、行為者のコミットメントは自分の意図する事態を実現したいという欲求に由来する、という点に実践的知識の一人称特権の根拠を見出す。そしてこうしたコミットメントに実質を与えているのは「実践的推論」という計算の正しさである、という論点を最後に導き、論を締めくくっている。

竹内氏の論文は、実践的推論と合理的意思決定との関連や、行為の因果説に対する理解などに関して不足感がなくはないが、実践的知識とアスペクト知覚とのつながりを暴き出したり、実践的推論の行為論における位置づけを詳細に行ったりなど、この主題における新しい論点を明確に提示することに見事に成功している。よって、博士（文学）の学位を授与するに十分値する論文であると判断する。